

行への想念

土 橋 秀 高

行への想念は、刻々のいのちの確認であり、且つ延びゆくいのちの足迹におさまる。

このような指向のもとに行一般への小見をまとめたものがこの稿である。

行は業であり、思の心所つまり意志に根元がある。その意志は根本無明にまつわれて種種の不浄業の波紋を画く。それに対して明・智慧にみちびかれた清浄業があり、これが仏業であり、仏教において云われる行そのものである。不浄・浄の差はあっても意志のあらわれにかわりなく、一般に行と云われるとき、仏行・清浄行・行目・行相……としてとりあげられると空洞化し概念に凝固される。行の理念と実際とに横たわるギャップ、ここに大きな行の問題がある。

理念として行は聖域に昇華され、仏教・仏事・仏寺・仏僧を頭ごなしに純粹清浄なものとする幻覚がある。そのためその幻覚を破られた事実には遭うと、逆に非難攻撃があびせかけられる。しかし仏行の実相はそのような順逆のとりあげにか

かわりなく、不浄と清浄との二つをつつみ、不浄から清浄へと還転するうごきがあり、それ故にこそ行が人間に意義をもつ。また仏行が個人と大衆との上にどのように具現するか、つまり人間の意志にもとづく根原的な不浄業をどのように仏業仏意に近ずけるかということでもある。

既に仏教全般にわたり実践の体系が立てられ、各宗の行儀実践法としてまとめられているが、そこでは行の概念化をくりかえし、形骸化されて行そのもののいのちを枯渇し、更にそれから逸脱してしまっている。一方では行の概念・形骸化という宿命を断ち切り、行の成果を意識せず果報を打算せず、純粹行に参入せんとする先哲のめざましい業績も残されている。しかしそれにもかかわらず、その行も人界に動き跡づけられるとき、また形骸化がすすめられてゆく。のがれがたき宿業である。

行業はいのち即ち生命意欲を核とし、輪廻無窮に迷妄の自からを形成してゆく。そのいのちの自覚が時尅の極促であ

り、經に行業果報不可思議、仏世界亦不可思議と示される。厳しいのちの主体的な把握である。ところでこの行の厳しさに上記のような積極的な意味の場合と、いま一つ消極的な意味の場合とが考えられる。仏教の伝統をふまえて、行は行目・行位として組織化される。そしてその型を追い理想にせまらんとする精進努力、そこにある厳しき、人は多くその姿を讃仰し且つ仏道の意義を確認する。それは人間の盲目的意志にもとずく脱落・慢情・反抗を克服しようとする努力であるが、その反面では習性化一律化がともない行法の厳しさを失い觀念的に空転して、本来の行の厳しきから離脱してゆく。行のマンネリ化であり、行というワクのなかに閉じこもる。

この迷執を破るものは、輪廻無窮の迷妄から自からの眞の姿を自覚する積極的な意味の行の厳しさである。それは常に行目・行位・行功・行果にいざなわれる心を絶ち切つていのちの眞骨頂にせまる行である。つまり行目・行位にならずみ客観化しさらに概念化に向わんとする、人間本来の奥底にもつている我執にもとずく惰性を、深く内に向つて沈潜せしめる無我行であり空観である。それは懺悔となりまた歡喜をもともなう。何故なら無我行は、我執にかたまつて自己自身を虚飾せんとする自己、欺瞞にはしる自己を絶対否定して、自からのいつわりなきすがたを如実知見せしめるものであるから。その厳しは他におしつけられるという被害意識にまつわ

つて苦しみたむというのでなく、自からが自からにめざめる極促であるから歡喜が涌く。

行はまさしく人間のいつわらざる生そのものの姿の自覚である。仏行・行目・行位・行果のワクにはめられたり觀念化されない以前の行そのものを把持すべきある。是非善惡を超えた生そのもの、生死一如の生にその厳しきを感じ得る。それは常識的・生物学的な次元で云々される生と死とではない。生死を超出したところから意義づけられる生と死とである。行者の生は死と一枚に把握されている。死また同様である。永生不死の上に死が自覚され、死に直結して生をゆく。死出の装束に小刀をかいばさむという回峯行者、往相即還相の信に生死をうけとめる念仏行者、すべてこの行の厳しきを生死一如のかまえに具現している。このいのちの厳しきに直面する無我行は、生死を超越した出世間の仏行であり、これこそが清浄行である。そこに仏の三業があり三密が現成され、行者の三業三密と融合する。

さて消極的な意味での行、それは組織体系すけることにより概念化してマンネリズムに落ち込むが、凡夫の行業を如来清浄行にかよわせるためには大きな意義をもっている。方便行としての意味内容である。云いかえるなら無我行の境から、我執によるほか手がかりを求め得ない凡情の真相を見ぬいて、それに対応して動く下化方便としての行の意味である。

この方便行が方便としての意味、すなわち如来行の追体験を教示する下化の真意に徹することによって、行儀乃至作法にはりめぐらされる仏行が領受される。このように消極的とは云え無視することの出来ない存在意義をもっている。問題はそれを惰性的に、我執をつのらせる概念・羅列の次元で受けとめるところにある。かくては行の純粹な自覚への沈潜とは全く反対に、我見にからまって俗化へのみちをたどる。行にあるいのちの厳しさを、神秘・幻想のベールでかぶせてしまふ異がここにある。神通力が云々々々され靈感と呼び、精神安定・療病・精神修養の次元に行を裝飾する。云うなれば仏行の福德蔵の面に心うばわれ、智慧蔵の真実に参入することを忘却する。ここに仏行の真実から猛反省されるべき仏教各方面の現相がある。

一般に行と云われるとき、世俗の次元でとりあげられ、福德行として沙汰されることが多い。もとより仏教は出世間法である。したがって行と云えばインドの昔より今にいたるまで、出家行が主軸におかれている。在家の位置・在家行はその周辺に附随的におかれている。時に大乘仏教の興起など、出家仏教に対して在家道が強調されることが、時代・地域においてあらわれたことがあるが、やがて出世間道の主座にある出家の型にはめられ、在家行はその世俗の故をもつて本流からは脇におかれることになる。

行への想念(土橋)

しかし考えてみれば仏陀の出家苦行以前には菩薩本行として世俗時の行が位置づけられている。また出家教団を核として流布していった仏教は、出家というワクにとじこもったとき、世間から浮き上って次第にその存在を稀薄にしてゆく。仏教が今に生きているのは土俗の風習のなかであり、俗を土壌としてこそ生きていると云わねばならぬ。インドにおける土着の民族信仰と融合して秘密仏教があらわれ、中国においても儒教乃至道教の影響なくしては中国仏教はなく、日本に伝わって神仏混淆の信仰を生む。その歴史の流れをおもえば事は自から明瞭である。これは仏教が人間世界に流布される人間を対象として形成されるものであるかぎり、人間の生態を基底とすることなしには存在意義を失うということであり、仏行の概念化は仏教を空洞化することになるからである。

ここに智慧行と並んで福德行が説かれることの意義がおもわれる。仏智への昇華という空行に離すことのできない世俗への福德行、それは車の両輪のごとく、人界における行の両面である。出家行が往往にして人間基底を遊離して枯渴化をたどりやすい危惧がともなうように、在家行においては、出世間法としての根本意を逸脱して在俗の意識にまきこんで、仏道を俗流の次元に汚染し、出世間道と自負しながら外相のみを飾って、世人一般よりなお俗悪な醜態をさらすことが多

い。仏行が聖域視されているだけに、このような行状は看過され得ないこととなる。

もとより、その外相の出家在家を問わず、崇高なる出世間仏行を歩む多くの人がある。そこには出家在家の別はない。一仏道である。在家出家の別は世俗の次元よりするものになさぬ、仏行とは在家が出家者の形に追従する、模倣するということではない。身は在家にありながら、自からのいのちの如実相を出世間道において直接にうけとめることである。それが行ぜられず、出家に権威をもとめ、自分ではできない行相、神秘的な靈力の保持者として出家者に追隨する。受戒・持戒や特別の行相に権威をもとめ、世俗的な信や打算を托す。このような姿勢は俗習の延長であって、俗の否定としての出世間道・仏道ではない。仏智への趣入ではなく世俗への墮墜である。在家者が人に依らず法に依って出世間道を進む。出家者が在家を同一次元の伴侶として共に仏道を歩む。それが仏行の真面目である。

いま、行は観念化・枯渴形骸化して、複雑な現代人の生活と遊離して、古文化財的なものとしてながめられている。一方では、いのちの自覚という行の真面目をはなれて、凡俗の打算よりのぞんで、自からに無いものを求め、奇異な神秘性によってそれを埋めようとする俗信が行をとりまいている。これは智慧・福德の行相分離である。

智慧行は所謂行のワクをはずし、無行の行としての道をたどる。さりとてワクがなくては手がかりが得られない。智慧は観念化して、現実につかず、現実を生かし得ず、したがって行たり得ない。行のうごきは固着し枯渴する。仏道の真髓は混然たる現実の真直中に位置づけられ、人界を仏法海として莊嚴することにほかならぬ。俗の俗に徹し人間眞実をつきとめて智をかよわすものであり、奇異な神秘のごまかしで開かれる道ではない。

俗に対応して臨機の行則がその足迹としてあらわれる。その行則はワクそのものではなく、ワクを踏み超え、いのちの自覚にみちびくものに外ならない。ワクにとどまってはワクの眞意をうけとめることはできない。

行相はときに分化し、あるいは統合の推移をたどる。しかしいずれにしてもどこでも、いのちの自覚とその厳しい行迹にあることが受けとめられてゆかねばならない。

（竜谷大学教授）